

金沢城石垣の変遷 1

北野 博司

1 はじめに

近世城郭を特徴付ける大規模な石垣は、城の防御や曲輪の擁壁、建築物の土台といった実用的機能と、権力表象やヴィスタ、空間演出といった象徴的機能をあわせもつもので、近世の土木技術を駆使して作られた巨大なモニュメントである。このような性格を有する石垣研究へのアプローチの仕方はいくつかるが、考古学的には石材加工技術や石積み土留技術といった土木技術史、あるいは石垣普請の労働編成といった政治・経済史的な視点が重要と考える。本稿では金沢城前半期の石垣編年の検討を目的とし、これらの問題にも若干触れてみたい。

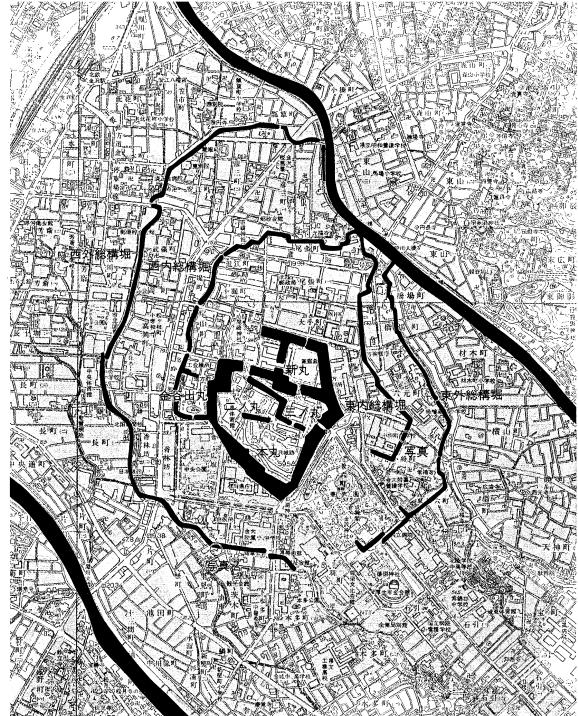
金沢城の縄張りは、天正期から徐々に整備が進み、元和7年（1621）頃には本丸の拡張とその腰曲輪の整備で一旦完成をみた。この段階までを第1期金沢城とする。その後、寛永8年（1631）の大火を契機に翌年にかけて、主要部の縄張り（二ノ丸の拡張と本丸御殿の移転など）や門の変更、城内の堀の水堀化といった大規模な改修が行われた。これ以降のものを第2期金沢城としている。本稿で編年の対象とするのは第1期から第2期の初め、すなわち天正期から寛永期頃までとする。それ以降は必要に応じて触ることとする。

編年 の方法は、まず、石垣の石材加工や積み方といった属性から現況石垣の分類を行う。考古学的には各類型間で入角部の入り組み関係や修築ラインから相対編年がある程度可能である。次に、文献・絵図の普請・修築記録⁽¹⁾と現況石垣の対応関係を検討し、各類型の時間的前後関係の把握と時期の推定を行う。平面的な発掘調査により造成土や裏込めまで含めて、直接石垣の前後関係や諸属性の新古が検証できるのが望ましいが、当面は史料批判しながら上記の作業を繰り返すのが現実的である。最後に、この作業によって組み立てられた編年仮説を、築造年代の明確な公役普請の城の加賀藩丁場の石垣と比較しながら検証していく。

2 石垣の変遷

石垣の変遷については北垣聰一郎氏による先駆的な研究があり、隅角部や築石部それぞれの石材の加工度や積み方、規格性、矩方や規合といった編年指標が明らかにされている⁽²⁾。

石垣は天正期から元和・寛永期にかけて、天守や櫓の設置とともに高さが飛躍的に増大し、その象徴的機能が強まった。これに応えるために隅角部の構造や勾配に改良が加えられ、石垣構築技術は短い時間の中で変容していった。そのあり方は全国的にほぼ同じ方向性を示している。これを支えたのは一定の技術基盤を有し、大名の築城ブームを支えるため各地に抱えられた石積み技術者たちであり、



第1図 金沢城の縄張り(県教委1993『金沢城跡』)

かれらは地域の石材の規制を受けながらも、設計者の要請に応えて石垣築成者としての技能を発揮していった。全国的な石垣様式の共通性や技術の平準化を促したのは、各地の穴太衆が參集して行われた公役普請がひとつのかぎになったとみられる。慶長期から元和・寛永期に築城された名古屋城や大坂城など、各藩の丁場をみると石材加工や積み方に個性が認められるが、ほぼ似たような変化を示している。公役普請の城は当時の最高権力者に関わりをもつあこがれ（模倣）の対象であり、追従すべき存在であった。それゆえ、新しい石垣様式の受容を通して、これと不可分の関係にある技術も各地で改良されるなり、他から伝播・受容するなりして、共通した石垣の特徴をみることができるようになったのであろう。

天正期から寛永期への石垣変化の方向性は、隅角部の算木積みの発達、石材加工、積みの規格化であった。角石は大型の築石利用から直方体の切石へと加工が進み、角脇石も存在しない段階から、築石利用、方形の小面を持つ切石へと加工が発達する。築石部は小面が凹凸のある自然石からやや平らな割石に、さらにノミ加工を加え平面的に変化する。積み方も石材の規格化に合わせ、乱積みから布積みに変化することは周知のとおりである。刻印は少量の小型刻印から多量の大型刻印へと変化していく⁽³⁾。このような変化の方向性の中で隅角部と築石部を一体とみなし、類～類に分類した。

ただし、今回の分類の指標は石材の加工度や刻印のあり方に偏重しているきらいがあり、積み方については石形と関連する表面的な要素のみで、背面構造も含めた石積み技術の本質的な部分はほとんど考慮していない所に問題がある。これは石垣の解体調査がまだ少ないことが主因であるが、表面的な積みの乱れだけで修築の有無を認定できないこととも関連している。

金沢城の石垣の主要石材は角閃石安山岩の戸室石である。城の南東約8kmにある戸室地区の沢筋や土中から転石を採取した。また、初期の石垣には大型の川原石も利用された。犀川や浅野川流域から採取したものとみられる。間詰石は川原石の円礫ないしは戸室石の割石が用いられた。

3 石垣の類型

ここでは寛永期から出現した切石（精加工石）積の石垣は対象外とし、自然石、割石、粗加工石積みの石垣を分類していく。なお、今回の分類は粗加工石の規格化が達成された類までとしておく。

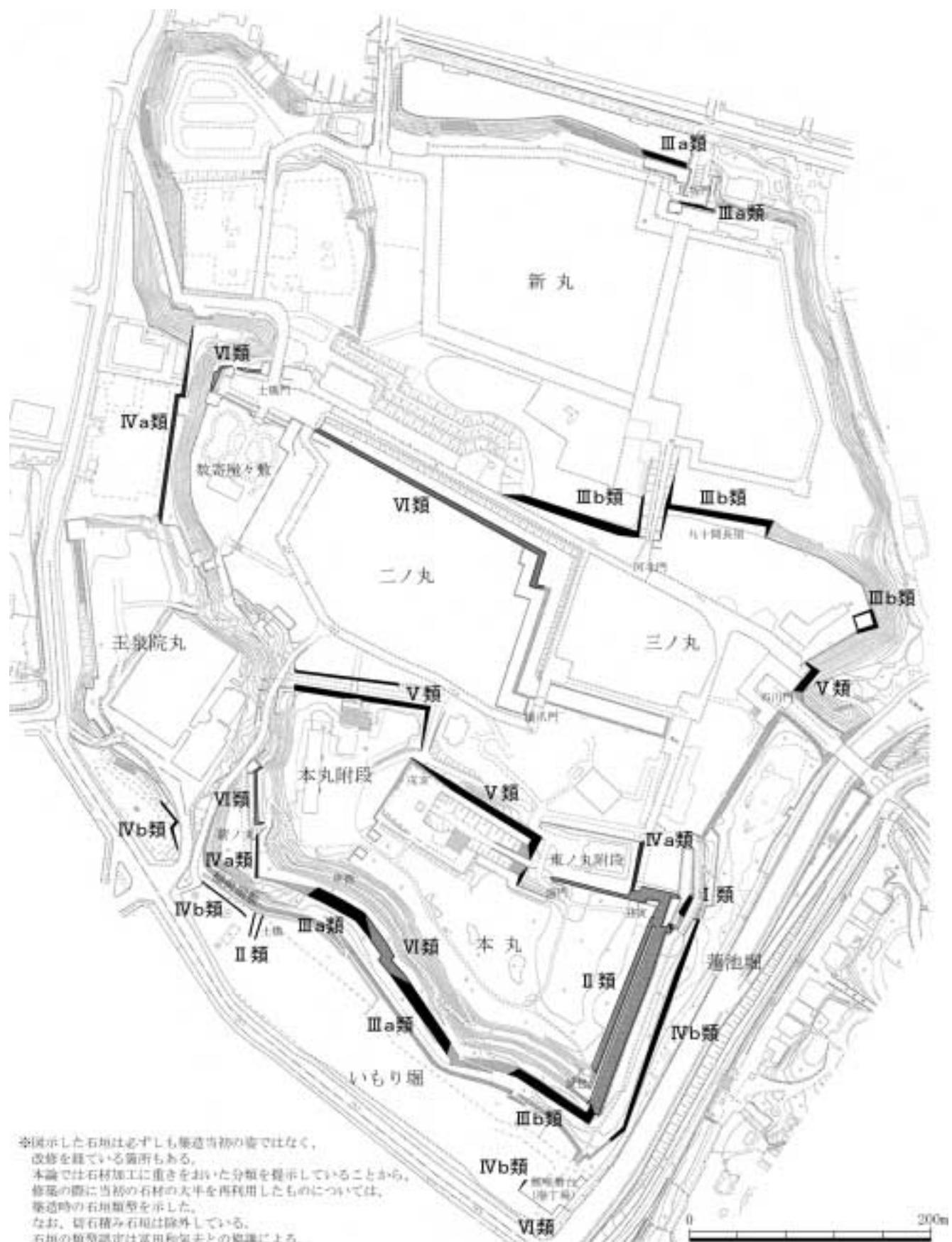
類 隅角部は算木積みが未発達で、角石は大型の石材を用いるが、控えが短く築石とかわらない。築石部は戸室石だけでなく、岩石種にバラエティーのある大型の川原石が用いられる。自然石主体で石口には大きめの川原石等が用いられる。

本丸丑寅櫓下東面隅角部埋め殺し石垣（写真1）がある。ただ、これは高さ3m余りの低石垣で、平成14年度の発掘調査では、この角部が作業工程上の仮設的な隅角部であることが明らかとなっており、普遍性のある類型として設定できるか疑問が残る。

類 隅角部は算木積みが完成し稜線が通る。角石は築石とは違う控えの長い石材を用い、面に一部ノミ加工が入るものがある。高石垣の築石部は大型の戸室石を用いる。側面の矢割りは認められるが、小面にはほとんどなく自然面を残すのが一般的である。大型の築石間に小型石を挟んだり、築石の割石や川原石の大小を間詰石とする。築石面は個々の小面の加工度が低いため凹凸があり、尻も左右に振れるものがある。刻印が出現するが量はごく僅かである。隅角部の矩は緩い。

本丸東高石垣（写真4）同申酉櫓下土橋石垣、同丑寅櫓下北面石垣（写真3）がある。

類 隅角部は角石のノミ加工が類より発達し稜角の明瞭な切石状となる。小面に対して尻のすぼまる形をなし、尻面は不整形でノミ加工はない。角石の長大化に伴って角脇石が定着する。角脇石は小面が方形を指向し、ノミ加工を行うものがある。角石に大型化した刻印が認められるようになる。築石は小面に矢穴痕のみえる割石が増え、面調整に部分的なノミ加工（瘤取り）を施す石も認められる。これらにより類に比べて石垣面が平らになる（写真11）。石形は依然として不揃いで乱積み風となる。間詰石には川原石の円礫を多用する。築石には小型の刻印が増える。築石の小面のノミ加工



第2図 分類の指標にした石垣の所在地

や刻印石の頻度は各石垣面によって差があるが、総じて石材製作の規格化への兆候が読み取れる。

本丸辰巳櫓下大角石垣（写真10）三ノ丸九十間長屋下石垣（写真13）を指標としたが、尾坂門籌台下石垣（写真6）同枠形内埋め殺し隅角部（写真7）本丸申酉櫓下埋め殺し隅角部（写真8）では角石・角脇石の形状や加工が未発達で築石の小面も割面の頻度が相対的に低い。現状では両者の各属性が十分整理できており細分には課題を残すが、隅角部の特徴等から仮に前者を a類、後者を b類としておく。

類 角石は直方体状の切石となる。角脇石もノミ加工が発達し、隅角部は 類と大差ない。築石の小面はさらにノミ加工石が普及し、小型の刻印が過半の石にみられるようになる。東ノ丸附段東面石垣（写真17）薪ノ丸南石垣（写真15・16）はともに石材加工の特徴から本類と認定したが、ともに寛文年間に修築されており、当初の積み方は残っていない。両者は算木積みの大面の長さが小面の2倍をわずかに超える程度しかなく、角尻が四つ目風になる特徴がある。また、本丸の腰曲輪にあたる稻荷屋敷下さいもり堀縁石垣や本丸東蓮池堀縁石垣も本類に属する。これらは隅角部の良好な資料に恵まれないが、前記のような直方体状の角石とはならない可能性が強い。用材や加工程度は場所によって使い分けられた可能性がある。

類 隅角部は直方体状の角石と方形の小面をもつ角脇石に定型化する。角部の隙間には薄いクサビ状の詰石を用いる例がある⁽⁴⁾。角石の大面は小面の2.5倍程度あるのが一般的である。築石の小面は不定形ながら全面をノミ加工し、間詰石には川原石の他、三角形や長方形の戸室石の割石を多用して石口を塞ぎ、平面感の強い石垣面を構成する。築石には特徴的な大型刻印が認められ、頻度は極めて高い。石材は小面の形が依然不揃いながら、石割が発達し全体の形は尻すぼみの規格化した形となる⁽⁵⁾。これにより布積み傾向が顕著となる。石川門下（白鳥堀側）石垣（写真18）二ノ丸内堀創建期石垣（写真20）本丸北面石垣（写真19）極楽橋下石垣（写真21）がある。

類 本稿の主題ではないため詳述しないが、粗加工石の規格化が進行した石垣（写真22・23）である。隅角部の江戸切が明瞭になる。石積みでは築石部で胴間に豆砂利を詰める技法や、切石部では石材の隙間にクサビ（敷金）やカスガイを詰めて勾配等を調整する技法が用いられた（写真24）。築石の規格化に伴い胴部にも粗ノミ加工がかなり入るようになった。小面は四ないし五角形を指向し、全面ノミ仕上げとする。築石の規格化により布積みが発達し、間詰石は川原石の小円礫を用いる。相紋系の刻印は消滅し、「一」「二」「三」の数字刻印や「上」などを残す程度となった。

4 文献史料による石垣普請

次に文献史料からみた金沢城の石垣普請関連記事を取り上げてみたい。

天正8年（1580）～「かきあげて城の形になし」（「三壷聞書」）「自ら城縄を改め、東方に塹を掘り」（「越登賀三州志」）

天正11年～（1583）「惣構・一二の曲輪・本丸の廻り堤ほりけり」（「三壷聞書」）

天正14年（1586）「天守をたて候ニ付て」（「前田利家朱印状」）⁽⁶⁾

文禄元年（1592）本丸高石垣（「文禄年中以来等之旧記」「三壷聞書」）

慶長4年（1599）内惣構堀（「前田家雑録」他）「城堅を修め」、「この廓（新丸）は慶長四年の新築」（「越登賀三州志」）

慶長8年（1603）三階櫓築造（「三壷聞書」他）

慶長15年（1610）外惣構堀、高石垣（「文禄年中以来等之旧記」）

元和7年（1621）「西北之丸を御本丸江御取込」（「公儀へ被上候御城并御国絵図品々帳」老中奉書）「城縄僅かに改る」（「越登賀三州志」）

寛永8年（1631）「二三之丸ひとつに被成」「芳春院丸西之堀被成御掘度」「土留之石垣、芳珍（春か）院丸との間之石垣、北江明候門脇石垣等」（「国初遺文」「公儀へ被上候御城并御国絵図

品々帳」老中奉書)

これらには直接的に石垣普請を示す記録と付隨した建物の建築や縄張りの造成を示すもの、同時代史料と後世の伝記など様々なものがある。武家諸法度の城郭修補規定に基づく藩からの上申に対して幕府から出された老中奉書は最も信憑性の高いものである。文献史料の記述と現存石垣の考古学的な所見とをつきあわせながらこれらを検討してみたい。

は記録が同時代資料ではないが、金沢城が本格的な石垣作りの城になった年代として、また難工事であったことを物語るエピソードとともに利家留守中の出来事として後世に強く印象付ける石垣普請であったことが窺える。本丸東高石垣は、築石の小面が自然面主体の乱積みで隅角部の特徴からも文禄期の石垣とみてよかろう。伝承どおり大型の戸室石を大量搬入した最初の石垣普請であろう。この石垣に続く南側の高石垣がどこまで延びていたかは、本丸辰巳下二重出角の大角から先が類石垣に覆われているため不明である。

はこの時期に天守が建造されたとすれば他城の例からして石垣台があったとみてよかろう。寛永大火～宝暦大火間のものとみられる「金沢城東之御丸・御本丸絵図（金沢市立玉川図書館蔵）」には本丸南東部に一辺約28mの方形土壇状の遺構が描かれており、これが天守台跡と考えられる。その後、遺構は変形しながら19世紀代まで痕跡が残り、石が存在した（「高石垣等之事」）。本丸南東部の高石垣が文禄元年に東側を、慶長後期に南側を拡張造成したとする想定が正しければ、当初の縄張りにおいて方形土壇は隅櫓の位置にあったことになる。金沢城とともに高山南坊がその縄張りに主体的な役割を果たしたと伝えられる富山城（慶長10年）や高岡城（慶長14年）においても隅櫓が天守にあてられていた。また、土壇上には井戸が描かれおり、名古屋城や松江城でみられるような天守地階の施設であった可能性もある。天守焼失後の三階櫓造成は、本丸北側の大手道と唐門口の整備に連動した普請とみられ、本丸の南東隅という旧来の天守の位置を踏襲し、その西側に新置されたとみることができよう。

は慶長4年の「加賀陣之沙汰」に関連した項目である。内総構の造成については大方の文書に引用があり、このほか「前田家雑録」「越登賀三州志」には城郭整備に関する記録がある。後者は新丸がこの時に造成されたことを伝えており注目される。また、「文禄年中以来等之旧記」等では尾坂門が利長により築かれたことを伝えており一連の整備の可能性がある。現在の尾坂門枒形は石垣の特徴から寛永年間造営で、寛文年間頃に大きな修理があったことが読み取れる。しかし、慶長期の尾坂門の原型が門右手の篭台下と土橋石垣、正面の鏡積石垣に残っており、後者の左手には主圖合結記系の慶長図にみられる左枒形の隅角部が埋め殺されているのが確認できる。これらを利長時代の築造とする伝承が正しければ a類は慶长期でも前半におさまることになる。なお、正面の「破却石垣（車壠積）」（「城内等秘抄」）とされる大石の多くも矢穴痕のある割面に粗いノミ加工を施す類に属するもので、当初の石材がそのまま再利用されている。

は高石垣の場所について明記されていないが、「唯子一人伝」の後藤彦三郎の規定（高石垣12間以上）に従えば本丸以外にありえない。本丸東の類石垣を覆う、より新しい南側の類がこれに該当しよう。東側の一文字石垣に対して南を輪取りとしているのは、先行して作られた慶长期の堀が同様のプランであったことから、自然地形に規制された面と石垣強度の両面があったものと考えられる。この普請は、加賀藩が領地高に従い最大面積の助役を負担した名古屋城の公役普請で利常が留守中の出来事と伝承される。金沢ではさらに外総構堀の築造もこの年に行われたとされるが、余りにも普請が集中することから年代については幅を持たせて理解した方がよいかもしれない。

は本丸の拡張願いに対する老中奉書で、この時に本丸の北辺と西辺が拡張されたことが窺える。本丸屋形の火災（元和6年）が契機となっている。加賀藩にとっては武家諸法度下で最初の修補願いであった。平成14年度の発掘調査では石垣の特徴から、東ノ丸附段や左折れの唐門がこの時に整備されたことが明らかとなった⁽⁷⁾。なお、本丸北や西辺の石垣はやそれ以降の改修で現在みると

できない。本丸の腰曲輪に分布する 類石垣は型式学的特徴から 類、 類の間に入るこの段階に位置付けておきたい。

は寛永 8 年の大火を契機としたもので、二・三ノ丸の再造成、芳春院丸西（二ノ丸 - 数寄屋敷間）の堀・石垣造成といった縄張り変更の他、土橋門脇石垣、同所土留石垣（寛文 2 年「加州金沢城石垣破損之覚」）があげられている。第 2 期金沢城の二ノ丸造成が寛永大火を契機としたものであろうことは、平成 10 年からの発掘調査で確認された⁽⁸⁾。芳春院丸西（数寄屋敷）は本格的な切石積石垣（四方切合積 布築切合積）であり、後の寛文頃、宝暦頃、文化頃の改修時にも数寄空間にふさわしい伝統的な意匠が踏襲された。土橋門石垣は寛文 5 年に修理されており（後藤權兵衛「先祖由緒并跡々勤方等之覚」）現在寛永期の石垣を見ることはできない。老中奉書は 6 月と 9 月に出されており、藩からの申請は普請箇所別に地図を付け細かく出された様子が窺える。この他にどれだけの願いが存在したかは不明であるが、現存する記録を見る限り普請規模はさほどでもないように感じられる。しかし、この段階に比定する 類石垣は城内全域に存在し、大規模かつ広範な石垣普請が行われたことは間違いない。

このような城内での石垣普請記録の他に戸室山周辺での石材確保を示す資料がある。後藤彦三郎が戸室石の切出、搬出拠点であった田嶋村や中山村の肝煎が所持していた高札等を写し取ったというものである（「戸室山初年号等留帳」他）。慶長 7 年（利長花押）、慶長 18 年（利常花押）、寛永 9 年（横山山城・本多安房花押）のそれぞれ年記があり、普請の者が野山の草木を盗ったり、田畠を踏み荒らすことなどを禁じたものである。これらの禁制については別途史料批判の必要はあるが、もし実在したものとすれば、各時期に頻繁に戸室石の搬出が行われ、石垣普請が行われていたことを傍証する材料となる。中山での戸室石の貯用制度が確立したのは万治・寛文年間頃とみられることから、慶長～寛永期では石切、石引作業と城内での普請のタイムラグをさほど考える必要はない。とすれば、慶長 7 年は に、慶長 18 年は に、寛永 9 年は に対応することになる。

以上から、 類、 類石垣が文禄期、 類石垣が慶長期、 類石垣が元和期、 類石垣が寛永 8 ・ 9 年頃にそれぞれあてられ、細分の可能性を示唆した 類は a 類を慶長前半、 b 類を慶長後半としておきたい。天守台が存在したと考える天正期の石垣は今のところ不明である。 類石垣にみるような川原石を含む多様な岩石種からなる石垣であった可能性があろう。場所による作り分けや穴太の技術差なども考慮した細分化、総合化は今後の課題である。

5 . 公役普請の加賀藩丁場

次に石垣類型の編年観が妥当かどうか、普請年代のはっきりしている公役普請の城の石垣で検証してみたい。公役普請では前田家の穴太が直接現地に赴いて作業を指揮しており⁽⁹⁾、金沢城の石垣と直接対比が可能である⁽¹⁰⁾。

江戸城 梅林坂から本丸に上がる左手に刻印等から加賀藩普請丁場とみられる石垣がある（写真 25）。慶長 11 年（1606）の普請箇所とみられ、石積みの特徴は金沢城 類に該当する。角石はノミ加工が進み、角脇石の小面は方形の割石で一部にノミ加工が認められる。築石は割石で部分的なノミ加工を施し、刻印が入る。石材は安山岩である。慶長 12 年（1607）頃に築かれた駿府城二ノ丸加賀藩丁場も類似した特徴をもつ（写真 26）。

名古屋城 写真 27 は「名古屋城普請丁場割図（名古屋市蓬左文庫蔵）」に前田筑前守の名がみえる二ノ丸南東角の石垣で慶長 15 年（1610）の築造である。金沢城 類に該当する。角石は大面、小面ともノミ加工を施す。角脇石は方形面をなすが割石のままである。築石は割石で一部面調整にノミが入るものがあるが量は少ない。ほとんどの石に小型刻印が認められる（写真 28）。間詰は割石、川原石を用いるが密度が粗く、石口が開きぎみで前田丁場の特徴の一つとなっている。石材は砂岩を用いる例が圧倒的に多く、花崗岩を使用する個所もある。築石の特徴は慶長 14 年の高岡城の土橋石垣とも共

通する。

大坂城 德川大坂城の石垣普請は元和～寛永年間にかけて行われた。「大坂築城丁場割図（国立国会図書館蔵）」「元和五年摂州大坂之御城普請丁場名付之図（尊経閣文庫蔵）」などで松平筑前守（金沢中納言）の丁場が読み取れる。造営は元和6年（1620）、寛永元年（1624）、寛永5年（1628）と三次にわたった。石積み方法が短期間のうちに変わっていくのが分かる好資料である。

写真29は元和6年の青谷口北西角である。隅角部は切石による算木積みで、角石の尻や角脇石はやや不整形である。隙間にはクサビ状の詰石が認められる。角石の小面には大型刻印が入る。築石はほとんどノミ加工を施すが、矢穴や割面を残すものも多い。石形は不揃いで布積みは粗い⁽¹¹⁾。刻印は小型で頻度は高くない。間詰は割石主体で三角や縦長の小石をパネル状に詰める傾向が見え始めている。金沢城 類に該当しよう。ただ、 類の特徴とした要素が出揃っている点では両者の識別に課題を残す。

写真31は寛永元年の内堀山里曲輪北東角石垣である。隅角部は切石の算木積みだが、依然として角石の尻や角脇石の石形が不整形で詰石が多用される。築石は石形がやや揃い平面的なノミ加工を施して布積みとなる。角石の形状・加工、築石の石形の揃い具合、布積みの度合いは場所によって差がある⁽¹²⁾。刻印は小型である。ただし、本丸北（山里曲輪南）では大型化したものも認められる。間詰は三角や縦長の詰石が目立つようになる。築石部に金沢城 類の特徴が認められるようになる。

写真32は寛永5年に築かれた玉作口左手の南外堀石垣である。角石は尻面の整形を行い、角脇石も方形となる。築石は石形が揃い面加工が進んで布積みが発達する。ほとんどの築石に刻印があり小型が主体である。「に三」など一部には大型化したものがある。写真の箇所では石口にはくさび形の間詰が丁寧に打たれている。外堀外周の石垣は石形がやや不揃いで横目地の通りも悪いため三角石や小石の間詰を多用する。金沢城 類に該当する。ただし、金沢城内の築石はこれほど規格化せず、布積み、間詰もやや粗い。

以上、公役普請の城と金沢城の石垣の対比から前項で想定した 類～ 類のおおよその年代が検証できた。なお、 類は修築記録との対比から寛文年間頃の石垣に比定できる。

6 刻印・石材加工からみた普請体制

文禄期の刻印は彫りが浅く、数も少ない。本丸丑寅櫓下北面石垣では表面で確認できるのはわずか1点に過ぎない。本丸申酉櫓下土橋石垣では刻印とともに墨書符号が認められた⁽¹³⁾。刻印が小面に定量的に認められるようになるのは 類石垣の慶長期からである。 類は小面や胴に矢穴痕を残す例が急増する。 類石垣よりも石材加工に要する労働量がかなり増加したことは、組織的労働を促したはずである。慶長後半には本丸辰巳下南面石垣や三ノ丸北面石垣のように築石の刻印が増えるとともに、角石には小面にかなり大きな刻印が打たれるようになる。慶長12年頃の駿府城や慶長15年の名古屋城のように公役普請では刻印の頻度が極めて高く、バラエティーも多い。「延宝金沢図」にあるようないわゆる相紋系の刻印は、寛永期の石切丁場での刻印の存在形態を参考にすると、石材調達を家臣に軍役として課すような方式が想定される。この頃の石垣普請を「三壺聞書」が「土普請」としているのはこのような体制を指すと考える。普請のたびに篠原一孝のような臨時の「普請大奉行」（「文禄年中以来等之旧記」）が任命され、その下で石切たちが編成されていた（「高石垣等之事」）。名古屋城などで刻印の頻度が高いのは、公儀の普請ほど軍役の性格が強く、組織的な編成が要請されたのが一因ではないかと考えられる。

金沢城で過半の築石に刻印が認められるようになるのは元和期の 類からである。寛永8年頃の 類にはさらに増える。刻印の大きさも慶長、元和、寛永と確実に大型化し、象徴的な意味合いを帯びてくるのが感じられる。とはいえ、この間の刻印のあり方は、基本的な石材調達方式に変化がなかったことを示している。石材供給地である戸室山周辺では近年、石川県金沢城研究調査室により寛永8

年頃の石切丁場が続々と発見され、谷筋や斜面を単位とした支群ごとの複数の刻印群のまとめりが確認されている。石切丁場の経営と石材供給体制を復元する重要な資料となろう。

一方、先に規格化が進行した類石垣では相紋系の刻印が消え、数字刻印等となることを記した。刻印の絶対数にも減少が認められた。これは臨時的な「土普請」に対して藩内の職制に基づく組織的な普請体制の確立を意味するものと解される。

加賀藩では、普請奉行下の技官である「穴生」の下に、実際に普請丁場を切り盛りする「扶持人石切」、その下で石工として作業する「二十人石切」が組織された。元和・寛永期に10名以上いた穴生は、その後減少し、小松城や明暦の江戸城天守台普請の後には、世襲穴生三家の4名程度に定着する。「二十人石切」の編成については、「万治二年之御定」(「文禄年中以来等之旧記」)や「延宝金沢図」で集住区域があるように遅くともこの頃には制度化されていた。規格的な類石垣が寛文の大修理(寛文2年の地震被害ほか)箇所に顕著に存在することから、綱紀の万治・寛文年間には新しい職制に基づく普請体制が軌道に乗ったものと思われる。おそらく、公儀穴太の下で、400人の石工が組織的な編成を受け、江戸城天守台復興という一大事業を遂行したことが契機になったのではないか。技術的にも類石垣から普及する江戸切や敷金がその影響を受けた可能性がある。寛永期の石垣石材が刻印を打った完成品の形で石切丁場に多数残されているのに対し、寛文期の石材は今のところ戸室山周辺では発見されていない。石材の搬出体制も職制の整備と中山貯用石場の成立によって計画的な運用が可能となつていったのであろう。

【註】

- (1) 北野博司「加州金沢城の石垣修築について」『東北芸術工科大学紀要』8 2001年
- (2) 北垣聰一郎『石垣普請』法政大学出版局 1987年
- (3) 小面全体を覆うようなものを大型刻印とするが、小型との間に中間的なものも存在し、現状では量的なものも含め相対的な比較にならざるを得ない。分類と変移幅を明確にするために今後一定の数値化を試みる必要があろう。
- (4) クサビ状詰石は角石・角脇石の加工度と大坂城の例から類(東ノ丸附段北東隅角部)にも存在する可能性がある。
- (5) 類石垣の解体調査例がないため石作りの規格化の過程は不明な点が多い。
- (6) 見瀬和雄「金沢城の創建と前田利家」『石川県史だより』第39号 2000年
- (7) 平成14年1月29日付け北陸中日新聞、北国新聞各夕刊
- (8) (財)石川県埋蔵文化財センター『石川県埋蔵文化財情報』創刊号～第3号 1999年～2000年
- (9) 天正11年からの豊臣大坂城普請に参加した穴太源太左衛門(穴太家「先祖由緒并一類附帳」)元和6年の徳川大坂城普請に参加した戸波清兵衛、万治元年の江戸城普請に参加した小川長右衛門他(古伝書、文禄年中以来等之旧記)などの記録から窺える。公役普請では石切、石引、普請の一連の工程が各大名毎の責任で行われた。
- (10) 使用石材の差(例えば硬質の花崗岩など)が加工度の面で規制要因になる可能性はあるが、実際に各城の石垣を観察する限り両者の差は少ない。大名毎に丁場を受け持つ公役普請は秘密主義の下で行われはしたが、一定の情報交換や視覚的情報はかなりあったはずである。金沢城の慶長期、元和・寛永期の石垣の変遷は江戸・名古屋・大坂での公役普請の経験と情報によりながら転換していくものと考えられる。大坂城での前田丁場の石垣は特に築石の加工度・布積みと間詰の打ち方で他藩とは著しい違いをみせ、伝統的様式を保持しているように感じられる。藤堂高虎による加賀藩穴太衆らの技術への評価(「元和六年案紙」)の背景はこのあたりに原因があろう。
- (11) 青屋口の写真的部分は修理されている可能性があるものの、同所左手の東外堀沿いの未修理箇所でも同様の特徴がある。(写真30)
- (12) 大坂城の石垣(粗加工石積み)は同時期のものがすべてが同じ積みをしているわけではなく一定の幅が認められる。それは場所(内郭・外郭・堀・門等)による石材加工や積みの使い分け、担当穴太による技術差等が内在するからであろう。
- (13)(財)石川県埋蔵文化財センター「いもり堀第3次調査の概要」現地説明会資料 2000年



1 本丸丑寅櫓下東面石垣・隅角部埋め殺し



2 本丸丑寅櫓下東面石垣・隅角部



3 本丸丑寅櫓下北面石垣



4 本丸東高石垣・築石部



5 類刻印 本丸東



6 新丸尾坂門かがり台下石垣



7 新丸尾坂門隅角部埋め殺し



8 本丸南高石垣(申酉櫓下)・隅角部埋め殺し



9 本丸南(申酉櫓下)・築石部 自然面残すもの多く、刻印少ない。



10 本丸南高石垣(辰巳櫓下)・隅角部



11 本丸南(辰巳櫓下)・築石部 割り面・刻印が目立つ。



12 類刻印 本丸南(辰巳櫓下)



13 三ノ丸九十間長屋下石垣・隅角部



14 三ノ丸北石垣・築石部



15 薪ノ丸南石垣 類石垣の石材等で寛文期に修築。



16 同左・築石部 類石材で寛文期に修築。



17 東ノ丸附段東面石垣 類石垣の石材等で寛文期に修築。



18 石川門下石垣（白鳥堀）



19 本丸北石垣・隅角部



20 二ノ丸内堀石垣 上部は右が宝暦13年、左が文化5年修築



21 極楽橋下石垣 類石材 大型刻印が集中する。



22 薪ノ丸北石垣 寛文6年修築。



23 二ノ丸舞台下石垣（菱櫓下）



24 敷金の使用状況 寛文8年修築二ノ丸菱櫓台石垣



25 江戸城二ノ丸梅林坂脇石垣



26 駿府城二ノ丸石垣(水路)



27 名古屋城二ノ丸南東隅石垣



28 同左築石部刻印



29 大坂城青屋口北西角石垣



30 大坂城東外堀青屋口東石垣



31 大坂城内堀山里曲輪北東角石垣



32 大坂城南外堀石垣(玉造口左)